

社会福祉法人創思苑
2023年度 事業報告

2023年度

社会福祉法人創思苑 事業報告 目次

目次

1	はじめに	2
2	創思苑概要	4
3	けんりょうご委員会	8
4	当事者活動支援	10
5	情報発信	14
6	部門別報告	16

1 はじめに

地域での生活支援の新たな始まり

2023年10月13日、14日、海外からのゲストを迎え、ピープルファースト大会in大阪を開催。その翌日から、京都、横浜、そして東京と集会が続きました。全日程を終えた次の日、TさんからのLINE。香川県の入所施設から理不尽な理由で契約解除された9人の知的障害者たちが、「地域で楽しく暮らせるように支援をしよう」というメッセージでした。

私たちの創思苑は、クリエイティブハウス「パンジーV」を香川県で運営しており、9人の内の一人は、すでにパンジーVを利用しています。他の8人がどうしているのか気になりながら、積極的な行動を起こすことはできていませんでした。そこに、TさんのLINEが背中を押してくれました。

大阪では解決策が見つかるかもしれないけれど、始動してまだ4年のパンジーVで何ができるのか…。多くの迷いを抱えながら、私たちは親に会うことから始めました。

私たちには、農作業の時の息抜きに使っていた休憩場所「ルシエル」があります。そこで「人手はありませんが、必要ならルシエルを日中活動の場に使ってください」と申し出ました。話は瞬間に進んで、その入所施設の元職員たちが協力をしてくれることになりました。家族の休養を支えるショートステイや、当事者たちの外出支援も実現できるかもしれません。

まさに、ルシエルはこんな時のためにあったのでしょうか？

突如契約解除をされた知的障害者とその親。そして、その人たちを気にかけていた元職員たちや協力を申し出てくださった人達。ともに地域での一人ひとりのくらしを紡ぎだす活動が始まります。私も、創思苑も一緒に歩みたいと思います。

選挙の扉を開く — 知的障害者の新たな挑戦と可能性 —

頼もしい友人から3年ぶりに連絡がありました。知的障害者や移民に対して、わかりやすい言葉で情報や学習の機会を提供してきた菅谷泰行先生でした。先生は、「ドイツ語圏でのやさしいことば」の研究者です。先生の提案は「コロナも落ちついたので、選挙を学ぶ会を作りませんか」というものでした。そして私たちの新たな挑戦が、2023年5月から始まりました。

選挙は知的障害者にとって容易なものではありません。どこへ行けばいいのか、誰に投票すればいいのか、投票はどうすればいいのかという一連のプロセスが困難を生んでいます。そこで私たちは先生と一緒に、「選挙って何ですか？」から学び始めることにしました。学ぶたびに、当事者の心は少しずつ開かれ、前向きになっていきました。

ついに迎えた5回目の学習会は、「選挙を体験しよう」。選挙管理委員会の皆さんの協力により東大阪市役所の期日前投票所で、実際の投票箱や投票用紙を使っての模擬投票です。参加者は30人の知的障害者。選挙についての学習、少人数グループでの投票練習を経て、模擬投票に臨みました。学習と練習を丁寧に進め、誰を選ぶかも一人ひとりが決めました。その結果、模擬投票は驚くほどスムーズに進み、それぞれの顔には達成感と自信がにじみ出ていました。

みんなのやり遂げた顔を見た時、私たち職員は、大切なことに気づきました。みんなは選挙に興味なかったわけではなかったのです。健常者と同じように選挙に参加したいと願いながら、どこから始め、誰に助けを求めればいいのかわからなかったのだと思います。また、私たち支援者も、候補者についてどう説明すればいいのかなど、選挙の支援に迷いを感じていました。しかし、この学習会を通じて迷いは吹き飛びました。今後はますます選挙そのものへの理解を深め、投票所へ一緒に行

こうと思います。

私たちはこの経験を通じて、菅谷先生が提唱する「やさしいことば」の重要性を再認識しました。また一つ、新たな可能性を感じています。

負の連鎖を断ち切るために

入所施設でくらしていた千頭さんが新型コロナの影響で中断されながらも、1年半の間に11回の体験宿泊を重ね、地域での暮らしを始めることができました。最初の頃は、新しい生活への不安や食事の時間を気にするなど、大きい声を出すことが多くありました。しかし、千頭さんの不安そうな表情や大声の奥の気持ちを想像し、その気持ちを理解するにつれ、安心できる関係を作ろうとする支援者が増えました。最初の頃3人だった支援者が、今では10人に増えています。

千頭さんの目を見張るような変化を間近に見る機会を得て、「どんなに障害が重くても、すべての人が地域で自分らしくくらす権利がある」と強く思いました。そのためには、千頭さんの行動特性を理解し、支援することが必要です。また国は地域で安心してくらすための制度を充実させる責任があります。どこも引き受けてくれない2年間、精神病院を転々としていたのが、今では支援者と身振り手振りで自分の感情を伝え合い、休日は電車に乗って外出し、お店で自分の好きなものを注文して、食事ができるようになりました。

今、日本には12万人の知的障害のある人が入所施設でくらしています。中には、何十年もくらしている人もいます。そして、入所施設やグループホームなどでの虐待件数は、高齢者施設の7倍以上もあります。その中でも、知的障害のある人が最も多く虐待を受けています。強度行動障害を併せ持つと言われている知的障害のある人も、元をたどれば、自分の要求を理解してもらえなかったことが、暴力につながった可能性は少なくありません。虐待を受けたストレスが原因で要求が増え、虐待の引き金になる。そんな負の連鎖を断ち切るために今、必要なことは何か？

それは、一人ひとりにあった支援の制度を作ることです。国が進めようとしている「強度行動障害のある人はグループホームへ」との方針は、見直すべきです。今グループホームでも虐待が多い場所になっています。まず様々なくらし方を考えること。そして一人ひとりに合わせた支援の制度を構築することが重要です。

自立への挑戦

国連障害者権利委員のロバートマーティンさんをはじめ、海外からのゲストと「入所施設をなくして知的障害のある人たちが地域で暮らすためにはどうしたらいいか」を共に語り合ったピープルファースト大会など全国各地での集会を実施しました。また「大空へはばたこう～自立への挑戦～」の上映会やシンポジウムも開催しました。多くの人々が入所施設について考え、自立への一歩を踏み出すきっかけとなったのです。

このような活動が契機となり、DPI日本会議、全国自立生活センター協議会、全国手をつなぐ育成会連合会、ピープルファーストジャパンと、日本の障害者を支えている団体と協力をして、ドキュメンタリー映画「大空へはばたこう」を全国で上映会を開催するための実行委員会を立ち上げました。そして、新たに入所施設に頼らない地域社会をつくるための勉強会も始まりました。

2023年の一つひとつの活動が、確実に根を張り始めており、「大変だったけれどやってよかった」と心から思います。関係各位には改めてお礼申し上げます。

(社会福祉法人創思苑 理事長 林 淑美)

2 創思苑 概要

1. 理事会・評議員会

○ 理事会を次の通り開催した。

2023年度第1回理事会 2023年 6月 2日

2023年度第2回理事会 2023年 6月28日

2023年度第3回理事会 2023年 11月22日

2023年度第4回理事会 2024年 3月14日

○ 評議員会を次の通り開催した。

2023年度第1回評議員会 2023年 6月21日

2. 利用者の状況

①日中活動・・・2023年度の開所日は、年間258日だったが、コロナ感染症のため、パンジーⅡ、パンジーⅢで3～5日程度閉所した。

○クリエイティブハウス「パンジー」 生活介護 定員32名

月別平均利用数 (人)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
30.5	30.6	30.5	30.6	30.6	31.0	30.3	31.4	30.4	30.2	30.2	30.8	30.6

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	0	0	2491	5419	5.69	30.6

○クリエイティブハウス「パンジーⅡ」 生活介護 定員30名

月別平均利用数 (人)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
33.7	34.2	34.5	33.5	34.5	35.4	35.7	35.2	33.1	31.6	34.1	30.4	33.85

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
143	0	1193	2338	5059	5.4	33.85

○クリエイティブハウス「パンジーⅢ」 生活介護 定員30名

月別平均利用数 (人)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
29.9	29.9	30.0	29.1	28.8	29.2	29.2	27.5	27.2	26.0	27.1	25.9	28.3

区別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	239	2315	2846	1913	4.88	28.3

○クリエイティブハウス「パンジーV」(従たる事業所ルシエル含む) 生活介護 定員20名

月別平均利用数 (人)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
16.14	16.57	16.41	15	15	16	16	16	16	15	17	17	15.98

区別利用者延人数/生活介護のみ (人)

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	216	693	2245	1482	5.07	18.0

○クリエイティブハウス「パンジーV」就労継続支援B型 定員10名

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
5.1	6.4	6.3	5.9	4.5	5.7	5.1	5.3	7.5	7.1	7.4	7.7	4.795

②グループホームつばさ (共同生活介護) 定員85名 26住居

○2023年度利用延べ人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	合計	平均区分
1098	1447	4069	6797	11828	25455	5.3

○年齢

	~29歳	30歳~	40歳~	50歳~	60歳~	70歳~	80歳~	平均年齢
人数	3	8	29	28	8	3	1	49.5

③グループホームきぼう (共同生活介護) 定員5名 1住居

○2023年度利用延べ人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	合計	平均区分
0	238	0	685	220	1143	5.0

○年齢

	~29歳	30歳~	40歳~	50歳~	60歳~	70歳~	80歳~	平均年齢
人数	2	1	1	1	0	0	0	34.6

3. 職員関係

① 職員の採用・退職状況（3月末の数）

	職員数	育休・休職者	入職者	退職者(年間)
2021年度	67	1	8	2
2022年度	72	0	14	7
2023年度	76	1	7	4

※嘱託職員含む

② 研修について

1, 内部研修

- ・新人研修:創思苑の理念・映像から学ぶ(講師:林淑美)
- ・新人研修:障害者の人権について(講師:姜博久)
- ・RDIから支援について考える(講師:池下沙祐里)
- ・アタッチメントと愛着障害について(講師:池下沙祐里)
- ・障害者虐待防止・身体拘束等適正化・セルフチェックについて(講師:栗原久)
- ・対大阪府オールラウンド交渉勉強会
- ・創思苑事業計画・理念と運営方針について(講師:林淑美)
- ・整理日職員研修「関わりの手がかりをさぐる」(講師:中新井滯子)
- ・やさしい言葉と選挙勉強会(講師:菅谷泰行)
- ・薬(向精神薬)について(講師:西村雅一)

2, 外部研修

- ・サービス管理責任者更新研修
- ・地域生活移行プロジェクト会議
- ・「知的障害のある人の自立生活について考える」ONLINE シンポジウム 2023
- ・障大連セミナー
- ・施設連絡会管理者向け研修、人材確保・定着セミナー
- ・モチベーションアップ研修 ～自分の存在意義を知り、仕事の向き合い方を知る
- ・えぼ研修 発達障害について
- ・地域で生きる権利部会

③ 外部会議への参加について

以下の会議に参加し、積極的に情報交換等を行い職員の意識の向上を図った。

- ・ピープルファースト大阪会議
- ・ピープルファーストジャパン会議

- ・東大阪市自立支援協議会
- ・相談支援連絡会
- ・障大連東ブロック会議
- ・東大阪市障害児・者施設連絡会
- ・東大阪市事業所連絡会(幹事会・グループホーム部会・短期入所部会)
- ・東大阪市共同受注連絡会
- ・地域生活移行プロジェクト会議
- ・グループホームの再編に反対する緊急ネットワーク会議

4. 年間行事・運動等について

- 5月・・・パンジーまつり(東大阪)
 - ふれあいまつり
 - 保護者懇談会
- 6月・・・健康診断
 - パンジー旅行(山陰方面)
- 7月・・・障大連総決起集会・デモ行進
 - 東大阪市市長選挙模擬投票
- 8月・・・対大阪府オールラウンド交渉
 - 写真部展示会
 - 東大阪市役所庁舎内販売会
- 9月・・・東大阪市市長選挙投票
- 10月・・・ピープルファースト大会 in 大阪
 - 東大阪市役所庁舎内販売会
- 11月・・・保護者懇談会
 - インフルエンザ予防接種
 - パンジーまつり(高松)
 - 「関わりの手がかりをさぐる」出版記念レセプション
 - 東大阪市ふれあいのつどい
- 12月・・・クリスマス会
- 1月・・・健康診断

3 けんりようご委員会 報告

1, 委員会の開催

理事長・チーフ・リーダー、当事者代表(生田進さん、梅原義教さん、山田浩さん)が参加した。4月、6月、8月、11月、12月、2月に開催し、話し合った主なトピックは以下の通り。

- ・身体拘束等適正化について
- ・障害者虐待防止について
- ・自傷行為のある方への関わりについて
- ・誤薬をなくすための取組について
- ・誤嚥しやすい方への支援について
- ・車への乗降時の支援について
- ・運転時のマナーについて
- ・身体介護の介護技術について
- ・怪我を予防するための取組について
- ・当事者のお金の使い方の支援について

2, 「事故」「興奮時の緊急対応」「苦情」の年間件数(2023.4~2024.3)

	I	II	III	V	GH	居宅	SS	送迎他	合計
事故(ケガ・急病)	2		1	4	7			1	15
(見失い)		2	1	1	2	2			8
(誤薬)	3			1	8	3			15
(誤嚥誤飲)	2	1							3
(車両)	3	5	2	10					20
(他傷行為)	2	1		1			1		5
(物損)	3	1	1	2	2			5	14
(異物混入)	1		2	1					4
タイムアウト対応									0
頓服対応	2	2		4	1				9
苦情	1	1	4		5			5	16

3, けんりようご委員会の1年間を振り返って

2023年度に起きた不適切や支援や事故等の要因として、支援者間のコミュニケーションが不足していることが多く見られた。当事者委員からも「職員はバタバタしている」「当事者のことをしっかり見していない」などの指摘があった。また、虐待防止を目的とした「職員セルフチェックリスト」や、働きやすい環境になっているかを確認する「労働環境・条件メンタルヘルスチェックリスト」を全スタッフ対象に実施したが、同様に部門内での話し合いがより必要な課題が見受けられた。

4 当事者活動・運動

ピープルファースト活動

2023年、第28回ピープルファースト大会 in 大阪が開催された。

パンジーに大会事務局が置かれ、支援者も配置。大会実行委員長にはパンジーⅢの山田浩さんが就任した。2019年の大阪大会に引き続き、2度目である。

月2回事務局会議を開き、パンジーや他法人の当事者と支援者が集まり、必要なことを話し合った。最初の議題はテーマを決めることだった。「どんな大会にしたいか」「みんなに何を伝えたいか、話し合いたいか」。様々な意見が出るなかで大きなテーマは「入所施設をなくそう」に決まった。そのために何をするか。海外の仲間と交流してきた山田さんや梅原義教さん、中山千秋さんからは「国連障害者権利委員のロバート・マーティンさん呼びたい」「入所施設をなくしたスウェーデンからエミリーさんに話をしてもらったらどうか」「インクルージョンインターナショナルの世界大会(イギリス・バーミンガム)で話をしていたカナダのコリー・アールさんの話も聞きたい」と具体的に案が出た。その後、全国実行委員会でも承認され、3人を呼ぶ準備が始まった。招待メールに対し、ロバートさんからは「日本の仲間が私にしてほしいと望むことは何でもやります」と返事があった。話は順調に進み、プログラムは決まってきたものの、資金が足りない。寄付を募り、クラウドファンディングにも挑戦。大会 T シャツを制作し、その売り上げも大会資金に回した。たくさんの人からの協力が得られた。

そして迎えた10月13日、大会1日目。これまでで最も多い1300人が参加した。「入所施設をなくしたい」と集まった人たちの思いが溢れていた。

ロバートさんたちからは、知的障害者が人としての権利を奪われてきたこと、当事者が声をあげることで人々の意識が変わってきたこと、そして今、障害者権利条約のもと、入所施設などの自由がない暮らしではなく、地域で一人の人間として当たり前暮らし権利が認められ、実現できるような世界中で取り組みが進められていることなどが話された。

大会は2日間に渡って開催され、その翌日からも京都・横浜・東京と日を変えて各地で集会が開かれた。東京では DPI 日本会議、全国自立生活センター協議会等などの全国組織とピープルファーストジャパンが共同で院内集会を開いた。シンポジストに全国手をつなぐ育成会連合会の久保厚子元会長も名を連ねた。「脱施設化」をテーマに、国会議員に世界と日本の当事者が入所施設をなくすことを訴えた。この取り組みや世界・他団体とのつながりは今も続いており、2024年度も「大空へはばたこう」上映会運動などを通じて「入所施設をなくす」ことを訴えていく。脱施設化への取り組みは、日本ではこれまで全く進んでこなかった。国はやる気がなく、ピープルファーストも含めた運動団体も「日本では難しい」とどこかで諦めていたところがあったように思う。そうではない、当事者が声をあげるんだ、支援者もそこに力を注ぐんだ、そして社会の関心を向けさせよう。

進むべき道を示した今回の取組は、とても大きなものとなった。

かえる会

2023年度のかえる会でも、「職員面接」と「理事会への提言」について話し合った。

職員面接では、パンジーが当事者主体として活動している事を伝えるためにも新人職員6名に面接を行った。昨年は2日に分けて行っていたが、1日にまとめたほうが勢いが出るという意見から、午前と午後を使い日程を分けずに面接を行った。その時の雰囲気を維持したまま、面接ができ「つっこみ」がいつも以上にできたという感想があった。

2023年度から、短い時間での面接で沢山の事を聞くために、事前に知れる事は面接を受ける職員に履歴書を作り提出してもらった。ベテランの生田さんがパンジーで働こうと思った理由を本人の言葉で聞きたいと思いが強く、最初のやりとりは生田さん主導で面接が行われた。また、グループ面接という意見もあったが一度に面接を行うとややこしくなるという意見があり、一人ずつ面接を行う事に決めた。

パンジーVの職員面接はパンジーVの当事者が主軸となり、リモートで大阪の当事者が参加した。パンジーVでの職員面接は2回目だったが堂々と面接を行い、それに補足する形で大阪の当事者も加わる事ができた。

理事会への提言では、当事者一人ひとりが意見を出す事ができた。

- ・新しい職員はパンジーの事を知ってほしい。当事者会議や運動に参加し、当事者と一緒に活動して学んでほしい。その学びを他の職員にも伝えてほしい。
- ・年金や生活保護など当事者の生活に関わるお金の事は職員がしっかりとわかって関わってほしい。
- ・忙しそうにしている職員がいるが、一人が動いているように思う。職員みんなでコミュニケーションを取り役割分担をし協力して仕事をしてほしい。
- ・職員は、相談しやすい雰囲気でいてほしい。さみしそうにしている当事者がいたら気づき、置いてけぼりにしないでほしい。
- ・当事者が責任を持ってしている仕事や役割を職員がしっかりと支えてほしい。

その他にも、パンジーⅢの横の倉庫をかりることになり、名前をかえる会で話し合った。投票の結果、広々としたゆったりと落ち着いた場所という意味の悠悠(ゆうゆう)に決定した。

また、ピープルファースト大会 in 大阪に参加しなかった人について話し合った。パンジー全体で大会を成功させようと呼びかけていたので、来れなかった人は欠席扱いになる事を確認した。給料の規定について疑問に感じた事は、職員間で決めずに、かえる会で意見を挙げ、かえる会で決定している。

グループホーム当事者会議

創思苑のグループホーム27ヵ所ですら当事者85名のうち、約20名が参加。高松のグループホームの当事者はZoomで参加した。2023年度は年5回開催することができた。

グループホームに入る介護者がたばこを吸う時は、ベランダで吸うようにしていたが、府営住宅の決まりではベランダでたばこを吸ってはいけない事になっていたため苦情が入った。

グループホームでのたばこの吸い方について話し合った。たばこに対しては様々な意見があがった。

- ・タバコの匂いは苦手。洗濯物に匂いがつく。
- ・グループホームに入る前に吸ってもらってホームにいる間は吸わないようにする。
- ・どうしても吸いたい時に建物の外に出ていきタバコを吸う。
- ・タバコを吸うのを辞めてもらう。
- ・府営住宅のグループホームに入る人はタバコを吸わない人に入ってもらおう。
- ・煙の少ない電子タバコにしてもらう。
- ・換気扇の下で吸う。

会議で出た意見から、みんなですべてどうしていくか話し合った。

タバコを辞めてもらうのは、難しいだろう。今まで入ってくれていた人が入らないのは困る。当事者がグループホームにいるのに、介護者一人でタバコを吸いに外に出るのは良くないなどの意見があがった。

最終的にはグループホームで空気清浄機を購入し、換気扇の下でタバコを吸うという事で話しがまとまった。

6月に開催した会議では、「衣服の間違ひがあるので困っている」という意見があがった。洗濯ネットに入れて洗濯をしたり、ハンガーを色分けして間違わないように工夫をしているが時々間違ひが起こっていたようだ。他人の服を着るのは誰もが嫌だと思つるので間違ひないでほしい。介護者一人ひとりの意識で変わるのではないかという鋭い意見が挙がった。

「当事者同士だが、あだ名で読んでくる」「部屋に何も言わずに入ってくる」という意見には、「一人の大人なので名前と呼ぶべきだ」「人の部屋に入る時は声を掛けるかノックをするのが礼儀だと思う」と周りの当事者の発言が的確であり、当事者中心で会議が進行される事が増えている。

その他にも「介護者の話し方が怒つたように聞こえる」「自分の悪口を言われているように感じる」という意見もあった。介護者はそんなつもりはなかったかもしれないが、そう感じさせている事を確認して当事者の気持ちに寄り添うように、法人で関わりについて再確認した。

選挙勉強会

2023年度の5月から、インクルーシブと言語の役割について研究をされている元大学教授の菅谷泰行先生を迎えて、当事者24名と職員4名の参加によって、定期的な選挙の勉強会を月1回程度のペースで開いてきた。

「みなさんは朝ごはんを食べるときに、今日はパンにしようか、ご飯にしようかと考えますよね。選挙もそんなふうに「選ぶ」ことなんです」。そんなふうにスタートした勉強会は、回を追いながら少しずつ、選挙の仕組みや、何を判断材料にして決めるのかといった話に進んでいった。

「選挙は分からない」と多くの当事者が言う。「選挙」というものに、知的障害の人たちはどんなイメージを持っているのか。勉強会のさなかに、わたしたちが聞き取りをしたアンケートではたくさんの意見が出たが、「投票所が暗くて、お化け屋敷のようで入りにくい」という辰巳正一さんの言葉が特に印象的だった。

「投票」という行為を「お化け屋敷」のように見せているもの。わたしたちはそれを少しずつ雪かきのように掻き出して、溶かしていくことをみんなでやっていったように思う。

目標はまず7月の、担当職員たちが市長候補に扮して演説を行い、みなを選び投票をする模擬選挙の実施だった。顔なじみの職員に投票するということから、みんな楽しそうだった。それをステップアップに、ひとまずの大きなゴールは、9月にじっさいに行われる東大阪の市長選と市議会議員選挙の期日前投票への参加でした。

そしてまた、模擬選挙の前にわたしたちは、市(行政)に望むこと、障害者として困っていること、改善して欲しいことなどを当事者と考え書いたり、代筆をしたりして、それらの意見をまとめたものを市長と主だった会派の市議宛てにメールで送ることもした。返ってきた議員の声を通じて、ふだん政治とコミットする機会の少ない知的障害者の人たちに、じぶんたちの日常と政治との接点を体験してもらおうという試みだった。

それらの様々な新しい挑戦のなかで、わたしたちは当事者の人たちがかつて見せなかったような生き生きとした表情を見せ、ときに積極的な物言いをし、当初は不安で押しつぶれそうだった人が、じっさいの投票を終えてじつにすっきりした、自信に満ちた表情に変わっている様を何度か目の当たりにした。

知的障害者の政治参加は決して不可能なことではない、ということ強く思った一年間だった。かれらが「選べないから」「選ぶ能力がないから」ではなく、それを政治的な選択としてすくいあげるツールを健常者であるわたしたちの方が、この社会の側が、残念ながらいまだに持ち合わせていないという学びを職員にもたらした一年でもあった。

講演会

2023 年度合計9件の講演会を当事者中心に行った。テーマとしては主に「脱施設」「地域で暮らす」「ピープルファースト」などを取り上げた。講演先として DPI 日本会議、障大連、他の事業所、小学校など。今年度の特徴として今までの当事者の原稿だけでなくパンジーメディアの映像を取り入れ、よりメッセージ性のある講演会を行うことができた。今年度はピープルファースト大会が大阪で行われたこともあり、その勉強会や大会についての講演会も依頼があった。

10 月 5 日に行われた NPO 法人自立生活センター・おおさかひがしより依頼を受けた『自分で決めたいねん！！～自己決定を考える～』をテーマとした講演会では当事者の中山千秋さん、山田浩さんが 2 人で講演を進め、自己決定の支援に必要なものは何かを伝えた。身体障害や精神障害の当事者からの質疑応答では、自身の経験などを話され意見の交換があった。当事者の気持ちをくみ取りエンパワメントをいかに引き出していくかに関して時間を少し延長して話し合った。

12 月には荒川小学校 2 年生、4 年生への講演会を行った。コロナ禍以降学校関係の講演会は減っている現状もあり、久しぶりの講演となった。児童からは「支援学級の友達のことをもっと知ろうと思った。仲良くしようと思った」等の意見が出て、先生からも児童が福祉や障害児のことについて考える良い機会となったと感想があった。講演の帰り道当事者の梅原義教さんが「やっぱり学校の講演もこれからも続けていかなあかんあ」と話していた。

パンジーでは以前より当事者を主役とした講演会を行っているが、それぞれの原稿や講演の内容を見直す時期にきている。今後は新しく講演に参加する当事者を増やすと同時にパンジーメディアの映像等を取り入れた内容の見直しを行い、今後も当事者のエンパワメントをうながし脱施設、地域で生きる、共生社会の創造に向けて講演会を行ってきたい。

- 1・第 12 回 DPI 障害者政策討論集会「総括所見を活用し、条約の国内実施を進めよう」
- 2・ヘルパー養成研修「障がい者の人権」
- 3・荒川小学校 2 年生 講演
- 4・荒川小学校 4 年生 講演
- 5・NPO 法人自立生活支援センター・おおさかひがし
『自分で決めたいねん！！～自己決定を考える～』
- 6・社会福祉法人ぶくぶく福祉会 勉強会
- 7・障大連総会 講演
- 8・国際医療福祉大学大学院 講演
- 9・社会福祉法人創思苑 新人研修 講演

5 情報発信

① インターネット放送局「きぼうのつばさ」放送内容

	パンジーの眼	私の歴史	パンジーキッチン	特集/ドキュメント
80回 4月	結婚してよかった～知的障害のある夫婦に聞く～	三村 伸雄	みんなで作ろう ～かしわもち～	
81回 5月	パンジーの眼	半山 芽吹	フランスのカフェでは、これ!! ～クロックムッシュ～	ドラマ「N」～わたしたちもひとりの人間～メイキング
82回 6月	知的障害者の想い		イタリアのシェフ直伝とくせいスパゲティー	「N」～わたしたちもひとりの人間～前編
83回 7月	津久井やまゆり園事件をわすれない	佐々木 千枝子		「N」～わたしたちもひとりの人間～後編
84回 8月	私の歴史スペシャル「やっと見つけた夢と未来」			
85回 9月	「きぼうのつばさ」放送7年特別番組			
86回 10月	ニュース ピープルファースト大会	糸井 孝裕	初挑戦！みんなで味わうメキシコの味 タコス	大空へはばたこう～自立への挑戦～千頭雄介②
87回 11月	選挙に行こう～だれもが自分の1票を!!		いつものおれいに～絶品トマトしょうゆラーメン～	大空へはばたこう～自立への挑戦シンポジウムⅠ
88回 12月	施設にたよらない地域を作るために	生田 進	フルーツパンケーキ～クリスマスケーキに大変身!?!～	大空へはばたこう～自立への挑戦シンポジウムⅡ
89回 1月	映画『月』を見て知的障害者が感じたとまどい、そしていかり…	奥園 幸聡	ティーウエリストが教える～あなたにぴったり茶～	大空へはばたこう～自立への挑戦シンポジウムⅢ
90回 2月	ふえつづける虐待	野畑 宏治	冬にはなべをかこんで～かきの土手なべ～	大空へはばたこう千頭雄介③ 入所施設から地域へ
91回 3月	ひとりの人間として～ともに語り合った5日間。そして始まるあたらしい一歩～			

②ホームページ・フェイスブック・パンジーだより等について

◆運営サイト

創思苑「自分で決める！」年間ユーザー 7,189 セッション 10,813 ページビュー 37,058

パンジーメディア 年間ユーザー 5,878 セッション 13,716 ページビュー 72,000

映画「あいむはっぴい！と叫びたい」

RDI コンサルテーション ——生きにくさを抱えた人たちへ

◆フェイスブック

社会福祉法人創思苑 フォロワー714 人

ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの／＜英語版＞ Gifts from the Himaraya

みんなに伝えたいこと～ピープルファースト25年の歩み～／＜英語版＞ In our Own Worlds

◆パンジーだより

NO.92 5月18日発行 NO.93 9月7日発行 NO.94 12月13日発行

NO.95 3月21日発行

◆DVD・映像制作・本

・大空へはばたこう～自立への挑戦～

・大空へはばたこう～自立への挑戦、シンポジウム編～

・かかわりの手がかりを探る 中新井滯子著 生活書院

社会福祉法人創思苑 パンジーメディア 企画編集

◆上映会

・2023年6月 大空へはばたこう上映会&シンポジウム東大阪市文化創造館

・2023年12月 ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの ころんつながり映画祭

・2024年1月 大空へはばたこう上映会 ほっこり枚方2023

◆メディア紹介

<TV>

・2023年5月19日 NHK【Eテレ】バリバラ「新型コロナとマイノリティーの3年振り返り編」

・2023年5月26日 NHK【Eテレ】バリバラ「新型コロナとマイノリティーの3年これから編」

・2023年8月4日 NHK バリバラ「知的障害×子育て 結婚の条件は不妊処置!?子育てする障害者の声」出演 山田浩・中山千秋

・2024年3月7日 KBS 放送【特集】障害者支援施設の契約解除から6カ月…利用者の今」

・2024年3月29日 NHK 新番組「toi-toi」出演 辰己正一

<新聞・雑誌>

・2023年6月14日朝日新聞『大空へはばたこう～自立への挑戦～』特集記事掲載

・2023年9月7日朝日新聞創思苑が支援する知的障害者による模擬投票体験の記事掲載

・2023年5月20日発行 情報誌『障害のある人と援助者でつくるグループホーム Vol.77』

・2024年2月20日発行 情報誌『障害のある人と援助者でつくるグループホーム Vol.80』に、ピープルファースト大阪大会の記事掲載

6. 部門別事業報告

部門	<p>クリエイティブハウス「パンジー」</p> <p>生活介護 GH(さくら・はやぶさ・てくてく・花吉・加納) ショートステイ</p>
部門の 目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・経験が自信に繋がっている。 ・当事者ひとりひとりが目標を持っている。 ・すべての当事者が社会で活動する
自分で 決める 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちが言える。 ・誰もが役割を持っている。 ・自分で決めたことを自信を持って続ける。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちを伝えることが難しい当事者について、文字や絵を選択するなど、本人ができる方法を見いだせるよう職員間で取り組んだ。 ・クリエイティブとパン屋で当事者それぞれの得意分野を活かせるよう、手作りのツールを用いて、すべての人が作業工程に携われるよう支援した。 ・本人が達成した目標を、当事者会で発表できるよう支援した。その結果、当事者が自信を持てたり、次への目標に意欲的になったと感じている。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との関わりを充実させる。 ・すべての当事者が地域で暮らしている。 ・誰もがその人らしい生活を送っている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・パンジーの畑では、地域の人たちに協力してもらい水道を設置できた。そのため多くの当事者が農作業の活動に取り組むことができた。 ・他事業所や行政と情報共有し、入所施設からの地域移行を進める事ができた。 ・本人、家族と相談し、自立に向けて3人の当事者がグループホームでの生活をスタートできた。うち1人は医療ケアが必要の為、訪問看護と連携することができている。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者と家族、職員が支援について一緒に考える事ができている。 ・職員は、全ての当事者と関われるようになる。 ・職員は当事者のことを知る。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・職員のコミュニケーション不足から、本人、家族との密な連携ができていない点に気付くことがあった。振り返りと進捗を確認しながら、改善していきたい。 ・職員間でロールプレイを実施し、実際の事例に基づいて支援方法を検討した。 ・先入観で決め付けず、当事者の可能性を信じて関わる姿勢を、オープンダイアログ(対話)形式で定期的に話し合った。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

<日中活動>

今年度、職員間で取り組んできたことは、チームとしての課題と、職員個人の弱点を把握し改善していくことだった。その中で見えてきたものは、コミュニケーションの仕方についてだった。パンジーの職員間では、各々が日頃よりコミュニケーションを多く取れている方だと思っていた。しかし、突然起きたトラブルの要因を紐解いていくと、コミュニケーションの多さではなく、その仕方に問題があるのではないかと感じる出来事があった。

計画された1つの予定があり、チーフから全職員に伝達していた。その後、職員間で相談をしながらその予定の進め方を変更していった。一見、相談しているので問題がないようにも思えるが、計画の主であるチーフが知らない場所での相談だった。この時点ですでに職員の中では、予定だけが実行できれば良いという認識しかなく、どういった理由でこの予定が計画されたかという最初の目的がどこかに行ってしまった。チーフが最初に説明をした際に、その目的の意味がそもそも伝わっていなかったこと、そして、受ける側も掘り下げて聞かないという組織の体質が浮き彫りになったと感じる。会話を多くしていたり、コミュニケーションを頻繁に取っていたとしても、お互いの思いであったり、なぜこれをするのかという理由については、実は関心が薄かったのだろうと考えさせられる出来事だった。

この一件は、職員間の業務だけでなく、当事者との関わりの中でも関連する問題だと感じている。相手に伝わっているだろうという思い込みや決めつけ、また、この行動はなぜ起きているのかという元々の理由を考えようとしないうちに問題が潜んでいるのではないかと振り返り考える機会となった。

<グループホーム>

2023年、強度行動障害のある当事者の、入所施設から自立生活の実現に向けたプロジェクトを引き続き進めてきた。本人が初めてパンジーに来た頃は、見通しをもって待つことが苦手で、飲食の要求が強く、とても大きな声が出ていた。また、施設の外へ飛び出していくことが何度もあり、パンジーで落ち着いて過ごすことが難しい様子があった。当初グループホームへの移行を予定していたが、本人の行動特性や環境等を総合的に考え、重度訪問介護を利用した1人暮らしをすることを決断した。

グループホームへの地域移行では体験宿泊制度が存在するものの、1人暮らしとなると体験時に使える国の制度が何もなかった。そこで、東大阪市の地域生活支援拠点事業である「体験居室制度」を使い、パンジーでの体験を重ねていく事にした。その結果、本人が地域で暮らす為のイメージを着実に持つことができ、2023年9月に東大阪での生活をスタートすることができた。現在は、本人と支援者が一緒に経験を共有してきた事で、見通しを持ち落ち着いて過ごせるようになってきた。お互いの関係性が少しずつ築けてきたことを実感している。

今回、入所施設からの地域移行は実現に至ったが、ここがゴールではなく、今後の定着支援をどのように進めていくかが、大切なことだと考えている。

その人に合った支援があれば、どんなに障害の重い人でも地域で暮らしていけるという事を、少しでも多くの人に知ってもらいたいと考えている。パンジーは、これまでの経験を社会の人に伝えていく、そういう役割になっていきたい。

部門	<p>クリエイティブハウス「パンジーⅡ」</p> <p>生活介護 GH:春宮・花園・あじさい・あゆむ・加納・あかだ・コスモスⅠ、Ⅱ・たんぼぼ・つばき</p>
部門の 目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が役割を持ち、自信を持っている。 ・すべての当事者が社会とつながって活動している。 ・一人一人が望む生活が実現でき、健康的な生活を送っている。
自分で 決める 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・外出活動が充実し、地域とつながりを持つ機会が増えている。 ・それぞれのライフステージや身体状況に応じた活動を行っている。 ・自分の役割に自信を持ち、積極的に取り組んでいる。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・外部イベントに積極的に参加することができた。しかし、日々の活動では外に出る機会がすくなかった。 ・園芸の定期販売では、苗の購入・植え替えなど当事者の役割を増やすことができた。 ・リラックス、ウォーキングは、前年度に比べ取り組む時間を増やすことができた。 ・ゆうゆうやパンジーⅡの近隣清掃を通して、当事者の新たな役割が定着した。 ・「選挙勉強会」や「私の歴史」の出演では、当事者が本来持っている力を発揮することができた。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・健康的に充実した生活を送っている。 ・医療が必要な人、年齢を重ねた人も、安心して地域生活を送っている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・GH との連携を強化し、通院の支援をした。また、訪問リハビリやマッサージにおいては、他事業所との協力を通じて医療面での連携を深めることができた。 ・身体機能向上の為の研修には、参加できていない。 ・これまでの支援の継続をすることはできたが、当事者の加齢に伴う身体機能面での変化が見られるため、その状態に応じたよりよい支援の充実が求められている。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者と家族、職員が自立に向けた支援を考える事ができている。 ・職員は、全ての当事者と関わられるようになる。 ・職員は当事者を尊敬し、その可能性を信じて関わっている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・3名の当事者がグループホームに入居し、自立生活をスタートした。 ・全ての職員がパンジーⅡの当事者に対して関わられるようになった。今後は、当事者が心の底から安心できる支援や信頼関係の構築に焦点を当て、支援の質を高めていく。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

日中:

創思苑は、「開かれた施設」にするために様々な取り組みをしてきた。日中の活動では、これまで地域との交流を大切にしてきた。しかしながら、新型コロナの感染拡大に伴い、外出活動が制限され、パンジーⅡ内で過ごすことが普通になってしまった。これにより、職員の意識も大きく変化した。

2023年度には、社会的にも新型コロナ感染が落ち着き、日常が戻ってきた。その為、外に出る活動を目指し取り組んだ。しかし、この3年間で染み付いた安心安全や無理のない環境を優先する傾向は変わらず、地域に出る活動への積極的な取り組みが難しい状況があった。

そんな中で新たな取り組みや、活動の幅が広がってきた人もいる。パンジーⅡに通所し始めて5年目の池島健人さん、榎本寛太さんだ。2人はこれまでパンジーⅡの中での活動がメインだった。しかし、2023年9月からパンジーⅡ前にできた「ゆうゆう(会議室・倉庫)」の清掃を始めた。池島さんは、室内のモップがけや拭き掃除、榎本さんは周辺のゴミ拾いや掃き掃除が役割として定着した。池島さんはこれをきっかけにマンション清掃の活動へステップアップを目指している。榎本さんは、時々近くの工場の人から「ありがとう」と声をかけられている。こうした取り組みを、もっと増やしていきたいと思っている。

また、法人の取り組みとして「選挙勉強会」や「読み方教室」がスタートした。そこに参加している当事者は、これまで見せる事のなかった「力」を見せている。仲野宏祐さんは、選挙勉強会に参加している。普段自分の気持ちを言葉にして伝えることが苦手だが、勉強会の中では自分の思いをしっかりと力強く発言していた。苦手と思っていたのは職員側で、仲野さんの本来の力を発揮する機会を提供できていなかったのではと反省する出来事だった。

グループホーム:

2023年には、パンジーⅡから新たに3名の方がグループホームでの自立生活をスタートした。その一人、難波広明さんのグループホームへの入居希望が出たのは2月だった。家族関係の煮詰まりがあり、保護者からのSOSがあった。家族の想いに応えると同時に、難波さんにも自立に向けたアプローチが始まった。4月の時点で、難波さんが入居できるグループホームの候補は2カ所。まずは、そこで体験入居をし、難波さんの自立への気持ちを確かめたいと思っていた。しかし、彼の自立への決意は私たちが想像していた以上にしっかりしたものだった。グループホーム加納を体験した難波さんは「ここで暮らしたい」とすぐに決めた。そして、6月には加納に入居し、今は、毎日夕方に散歩・買い物に出かけ、月に1回は外食をするなど、自立生活を楽しんでいる。週末は、家族の暮らす家に帰る。煮詰まった家族との関係も、難波さんが自立をしたことで変わったようだ。気持ちに余裕ができた家族は、再び難波さんと向き合うことができ、いい関係を取り戻している。

部門	クリエイティブハウス「パンジーⅢ」 生活介護 GH(よしだ809・もくもく208・こうのいけ・青空)
各部門の 目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりが楽しめる活動に取り組み輝いている。 ・自分の生活を楽しみ、健康的に過ごすことができる。 ・仲間のことを大切に考え、助け合える関係をつくる。
自分で 決める 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者それぞれの役割があり、自信をもって主体的に動いている。 ・料理や買い物など、自分のしたい活動ができている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの役割に加え夕食の自転車配達、パソコンを使った業務に取り組むことができた。また、メディアで当事者の役割が増えた。 ・当事者が選挙の勉強会や読み方教室などの活動に参加し、新たな学びを得ることが自信につながっている。 ・毎週金曜日にクッキングをした。はじめて経験する人もいて、皆で楽しめた。当事者の希望を聞きながらウォーキングや買い物などのグループ活動をすることができた。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・グループホームの生活が自分らしいものになって楽しめている。 ・訪問リハビリを利用しながら、体の柔軟を保ち健康に過ごす。 ・当事者が恋や結婚について周りに相談できている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・希望があった個人旅行に行くことができた。 ・訪問リハビリを利用し、体の柔軟性を保つことができた。 ・結婚について相談があり、具体的にどうしていくか話し合った。6月からグループホームで一緒に暮らしはじめることができた。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者と家族、職員が支援について一緒に考える事ができている。 ・職員は、全ての当事者と関われるようになる。 ・職員は当事者を尊敬し、その可能性を信じて関わっている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者や家族と話し合いながら支援をしているが、振り返りや継続ができていない部分があったので改善をしていく。 ・関わりが難しいとされている当事者の支援に数名の職員が携わることができた。これからも職員が全ての当事者と関われるようにしていく。 ・当事者が新たな活動に取り組み、役割を増やしていく姿を見て可能性を実感することができた。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

日中:

今年度はパンジーⅢから多くの当事者が、それぞれの役割や活躍する機会、やりがいを持って参加できる活動を見つけることができた一年だった。メディアでは、山田浩さん、辰己正一さん、中山千秋さんが NHK 番組に出演し、豊田さんはスタジオ撮影のフロアディレクター、有光さんはカメラマンとして、これまで支援者がやってきた役割を担うようになった。選挙の勉強会では、選挙の仕組みを学び、実際に投票をすることで知的障害者の政治参加を実現することができた。読み方教室では普段抑えられている感情を表現することが本人たちの自信にもつながっている。

また、グループホームに夕食の配達をしていた業者が、人手不足のために業務を終了した。毎日の夕食配達をどうしようと迷っていたところ、当事者に配達をしてもらおう案が出た。ヒントになったのは「自立の家つばき」の自転車部隊だった。そこで自転車のカバンを購入し、さくら、パンジーなど近い場所から当事者による配達が始まった。配達をしている人を見て、新たに希望する人もあり、スムーズに夕食配達ができるようになった。雨の日もカッパを着て配達をしている。業者にまかせたほうが確実だと思っていたが、責任をもって配達をする当事者は、生き生きしている。

寺戸猛さん、いつも買い物に行くコンビニから、他のお客さんの迷惑になるような行動があると出入り禁止を通告された。苦情を受けて以降、支援者が買い物に同行するようにした。

しかし元々は一人で買い物に行っていたので、支援者が付き添っていることについてどう思っているのか聞いた。一人でいきたいのか、このまま支援者が付き添ったほうがよいのか…。意外な答えが返ってきた。「支援者と一緒がいいです」。

意外だった。普段、支援者が話しかけても、素っ気ない態度の寺戸さんが、こちらが思っているよりも人との関りを求めているのではないか。社会のルールに反する行動をして、支援者から注意を受ける、その行動の根底には愛着の問題があると思われるが、支援者との関わりで満たされるものがあつたのかもしれない。

そう信じて、私たちの関わりを見直した。仕事あまり好きではない寺戸さん。誘いかけても拒否をすることが多い。一日の中で仕事をする時間を決めて根気よく誘いかけた。年が明けてある日のこと、自分から「仕事をします」と言ってくるがあつた。今までの寺戸さんからは想像できないような変化だった。

これからも私たちと寺戸さんの関係が変わっていくことを信じて支援を続けていきたい。

グループホーム:

グループホームで富田妙子さんの看取りをした。2022年に大きな病気が発覚して、いっしょに歩んできた一年だった。病状が進んで入退院を繰り返した。9月の後半から入院をしたときに、医師からこれ以上の治療が難しいことを告げられた。病院から緩和病棟へ移ったほうが良いと提案されたときに、本人の希望は「グループホームに帰りたい」だった。人間だれしも慣れ親しんだところに帰りたいと思うことは当然のことだ。パンジーで話し合い、グループホームに帰宅することを伝えたとき、体の痛みとだるさでしんどい中で見せた嬉しそうな表情が忘れられない。グループホームで仲間に見守られ、旅立った。グループホームが当事者にとって家だということを再認識した。

部門	クリエイティブハウス「パンジーV」 生活介護 就労継続支援B型 ショートステイ
部門の目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が役割を持ち、自信を持っている。 ・仲間同士、助け合えるようになっている。 ・健康で、活動的な生活を送っている。
自分で決める、役割を持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割に自信を持ち、積極的に取り組んでいる。 ・外に出る活動が増え、多くのことを経験している。 ・ピープルファースト運動などの当事者活動に取り組んでいる。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間同士の声かけも増え、日常生活の中でコミュニケーションを楽しんだり自然と助け合ったりする姿が見られて、当事者の中に少しずつリーダー意識が芽生え始めた。 ・飲食店の清掃委託業務や宅地の草抜きなど、地域の中で定期的に生産活動を継続している。収穫した野菜を出荷、納品する場所が増えた。 ・ピープルファースト大会 in 大阪に15名で参加することができた。かえる会に2名、選挙勉強会に6名の当事者が参加していた。
地域でふつうにくらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・グループホームがあり、自立生活を送っている。 ・体に良い食事や適度な運動を通じて、健康になっている。 ・創作活動を楽しみ、生き生きと生活している。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・4月にグループホームを開設し5名の当事者の新生活がスタートした。 ・グループホームと連携し、生活の安定を図っている。 ・ハイキングやウォーキングは継続している。 ・高松市のアートリンク事業は継続参加しており、創作品をベースにしたうちの商品化など新たな動きも始まった。 ・高松でパンジーまつりを開催し、関係機関や地域の子ども達など多くの来場者があり地域の人にパンジーVを知ってもらうきっかけとなった。
職員を育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者を尊敬し、その可能性を信じて関わっている。 ・自分自身の目標を持ち、それに向かって取り組んでいる。 ・全員が関りの困難な人に関わっている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週の会議で当事者一人ひとりに対する関わりを継続して見直した。またカンファレンスで得たアドバイスを実践し、フィードバックすることを繰り返すことで、支援について考える力が少しずつ身についてきている。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

日中:

2023年度は、利用する当事者が増え活動内容が大幅に拡がった一年であった。

半面、理由は様々だが支援者の退職が多い一年でもあり、安定した日中活動と生活環境を支える支援体制の確保に苦慮したが大きな事故や怪我もなく乗り切ることができた。その要因として支援者のスキルアップや連携力の向上もあるが、何より当事者の成長が大きいと強く感じている。パンジーVでの活動や作業に取り組む中で個人個人のスキルアップは勿論だが、仲間を気遣った声掛けや助け合う姿が多く見られるようになった一年であった。

また大きな出来事として、入所施設を一方的に契約解除された当事者5名と職員5名を受け入れ、新たな活動拠点として高松市林町にパンジーVの従たる事業所として「ルシエル」を開所した。活動内容など、まだまだ手探りの状態であるが地域で暮らしはじめた当事者を支えていきたい。

日中活動については当事者の得意な分野や特性を最大限に考慮しながら活動の幅と収益を高めてきた。さらにここ数年で当事者が増えたことにより、工賃を安定的に支払い続けられる収益性と当事者のやりがいの両方の視点で更なる作業活動の充実が求められた。そこで農作業においては安定した収量の確保と売り上げ向上のために、4年間を1区切りとした栽培ローテーションを組み立てるなど大幅に作付け計画を見直した。清掃作業は飲食店の定期的な清掃は継続しつつ、新たな清掃先の拡充にも力を入れた。軽作業は作業スピードや役割分担力が向上し、新たな受託企業が1件増えるなど少しずつではあるが作業量の増加に結びついている。

最後に佐々木千枝子さんを紹介したい。彼女は病気を患い、ゆっくり過ごしたいと2021年11月にパンジーVに通所するようになった。持ち前の明るいキャラクターで周囲を和ませ、いつも笑顔で「大丈夫」「がんばる」と作業も一生懸命だった。また楽しいことが大好きで「北海道に行きたい」「イクラが食べたい」と、周囲の心配をよそに北海道旅行や鳥取旅行に元気に参加することができた。また自分の人生をメディアで語る「私の歴史」への出演も果たした。しかし徐々に体力が低下し痛みが出始めた2023年8月中旬から通所することが出来なくなり、本人・家族の希望で自宅療養を続けた。パンジーVの仲間が訪問し手紙を届けたり、声をかけて励ました。11月30日に自宅で息をひきとるその日まで懸命に生きた佐々木千枝子さんのご冥福を祈ります。

ショートステイ／グループホーム

2024年4月にパンジーVのメンバーが暮らすグループホーム国分がオープンした。男性3名、女性2名の当事者が暮らしている。初めは緊張した様子で多少のトラブルもあったが、仲間との共同生活をしながら自由な生活を満喫している。

ショートステイは利用者が3名増えた。新たに小豆島から通う人は2連泊するようになった。今後も「地域で普通に暮らす」ためのイメージを持って一歩を踏み出せる様に、ショートステイでの支援を続けていきたい。

部門	自立生活支援センターわくわく/相談支援センターわくわく GH(もくもく308)
各部門の 目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を取り戻し、自分らしく、生きている。 ・支援者がチャレンジ精神を持ち、当事者とともに、成長する。
自分で 決める、 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・同年代と同じ楽しみや生き方を選ぶことが出来ている。
	達成度
	<p>[居]日中支援者と連携し、行き先を決めたり、日中支援者にもガイドヘルプに出てもらいその人の興味や活動が深まるよう支援した。当事者とのフィードバックも連携して取り組めた。</p> <p>[相]本人らしい生活が維持できるように支援できているが、より豊かな生活への支援までは出来ていないことも多い。地域とのつながり、事業所間での効果的な連携などが課題。</p>
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な環境にあっても、自分の暮らしに誇りを持っている。 ・支援者と信頼関係を築いて、自分の思いを伝えることが出来ている。
	達成度
	<p>[居]各場と連携し、本人のニーズを共有した。ガイドヘルパーに報告し、必要な場合には改善を求めた。</p> <p>[居]移動支援や行動援護計画を適宜見直した。</p> <p>[相]様々な困難を抱えている人と丁寧に関わっていくことで、良好な関係を築くことができたケースもあった一方で、不適切な距離感により、支援に行き詰まることもあった。</p>
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・支援者が当事者を尊敬した配慮、言葉遣いができるようになっている。 ・事業運営が安定し、課題に適切に取り組める環境になっている。
	達成度
	<p>[居]行動援護従業者養成研修を年1回開催した。</p> <p>[居]移動支援従業者養成研修を年1回開催した。</p> <p>[居]ヘルパー不足が年々深刻化し、依頼を断ることが増えている</p> <p>[相]主任相談支援専門員養成研修を修了した。</p>

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

【居宅部門】

2023年度は、延べ人数1,626人に約2,2万時間の派遣を行った。(移動支援・居宅介護・重度訪問介護・行動援護・同行援護の合計)

移動支援に関しては、コロナ禍も終息し、それぞれの人が好きな行き先を選ぶことが出来た。一方で、30数年ガイドを利用している人はマンネリ気味で、なんとなく土曜日にはガイドを申し込むというパターンになっているのではないかとの印象もある。趣味や生きがいにつながるような情報を伝え、習い事やスポーツなど決まった行き先を作るのもいいのではないか。また、加齢に伴い長時間の外出が難しくなった人にはニーズに応じて短時間の外出、外食などの提案も必要になってきている。

地域移行で受け入れた1名の当事者が重度訪問介護を利用した地域生活をスタートした。障害者権利条約で示されている多様な自立生活を実現する支援だ。資格を持つヘルパーの確保と、強度行動障害の当事者に関わるヘルパーを育成する必要がある。

また、引きこもりケースにも関わった。1年以上自宅から出ることが難しく、家族も疲弊し、ギリギリの生活を送っていた。そこでわくわくが当事者と一から関係性を築きながら、短時間の外出支援を繰り返すことで、徐々に自宅から外の世界に出ることができた。今では余暇外出を満喫され、日中事業所にも通所することができている。これからの目標はグループホームにチャレンジすること。ヘルパーを派遣するわくわくの役割・意義を改めて考えさせられた。

【相談部門】

2023年度は、個別の相談対応として新規に128名、のべにして700名以上の方々に関わってきた。新規の相談の経路は行政窓口からが約4割だが、地域の計画相談事業所や日中支援事業所から相談されることも増えてきており、地域の事業所から頼られる存在になっていることが実感できている。

民生委員など地域住民からの相談も数件あり、特にそういう場合は、ひきこもりやゴミ屋敷など「困難事例」であることが多い。最初は、地域から迷惑がられいても、介入したことにより、本人への理解が深まり、関係の改善に至ったこともあった。

4月から新たに玉川中校区も担当地域に加わったこともあり、マンパワー不足を痛感させられた1年でもあった。個々の相談員が単独で相談案件に対応してきたことで、相談員の抱え込みがおこり、支援の行き詰まりを感じることもあった。内部会議などを通じた人材育成の視点や、関係機関で集まって会議を開き、チームとして役割を明確にして関わる視点がおろそかになっていたのではないかと反省する。1人の相談員が、主任相談支援専門員の資格を取得したこともあり、今後は、相談員個々の力量に依拠した相談業務でなく、相談員同士が相談しあい、高めあえるよう努めたい。

わくわくは、何年も前から地域を巻き込んだ相談支援を実践してきた。主任相談には地域づくりの視点も求められているが、多職種も含め、関係機関とのネットワークは着実にできている。個別相談にも対応しつつ、事業所としての力量をより高めていきたい。

部門	自立ホーム「つばさ」
部門の 目指す 事	<ul style="list-style-type: none"> ・その人らしく、自信を持って生活を送っている。 ・安心できる支援者になれるように当事者の意見を大事にする。 ・望む生活の実現と健康な生活を送る
自分で 決める、 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことが実現でき、生活が豊かになっている ・自分の想いを支援者に話せるようになっている。 ・仲間と助け合いながら活動できている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・個人旅行やそれぞれのしたいことが実現できて、以前より生活が豊かになってた方もいた。 ・GH 当事者会議の場面で仲間に支えられて、自分の意見を言えるようになってきた。しかし直接支援者に話せる場面はまだ少ないのが課題。 ・当事者同士で家事を協力したり、いろいろなことを定期的に話し合うようになったホームがあった。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・健康の維持、向上を目指す。 ・その人に合った生活を送ることができ、充実している。 ・衣食住が拡充して快適に過ごせている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・入居者の年齢も上がり、食生活の見直しなど健康維持に努めてきた。今後は、向上にもっと目を向ける必要がある。 ・ライフスタイルを維持することはできたが、さらに充実するには課題が残る。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・職員はすべての当事者に関われるようになる。 ・介護者が当事者のことを知ることができるよう、率先して協力する。 ・研修等に積極的な参加をし、当事者支援を学ぶ。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての当事者に関わりが持てるような体制にしてきた。これからも継続して取り組んでいく。 ・介護者会議等で当事者の様子や支援のあり方について振り返ることができた。継続していく。 ・研修等に参加でき、その内容を当事者支援に生かせる場面が多かった。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

2023年度は自立ホームコスモスが完成し、それに伴ってGHの移動が多かった1年だった。綺麗な建物で設備が充実したホームで住みたいと思えるような建物ができるのは良かったと感じている。

今回の引越しで新たな生活をスタートして、今までは家事をこなさなかった方も新しい場所では家事をしたりと自分でできるところはチャレンジしていた。その姿を見て、今まで良かれと思って支援者がしていたことが、本人の役割や達成感を奪ってしまっていたのだと感じた。当事者がいきいきできる生活を目指して当事者の意見や要望をもっと取り入れた生活を支える仕組みを整えていきたい。

週末にコープ自然派が定着してきたが、それ以外では食事に関してはできるだけ安心安全なものを提供していく必要を感じた年だった。味噌汁のだしを昆布や煮干しで取っているホームや、だしの素を使っているGHなど様々で、できるだけ自然な食材にしていく必要があると感じた。当事者の健康も大きく左右されるため、今後も提供する食事に関しては体に良いものを工夫して取り入れ、持病の悪化や生活習慣病にならないように努めていきたい。

春宮では当事者と世話人で月1回話し合いの場を設定し、それぞれのライフスタイルの違い等で、生じる不満や、快適に過ごすためにはどうしたらいいかなどを話し合ってきた。自室のテレビ音量が大きく、他の当事者の部屋からも音量が聞こえてくる状況で「うるさくて落ち着かない」と言う意見が出た。他の人が迷惑しない程度に音量を下げることで解決された。職員や介護者から注意されるのではなく、話し合うことで、お互いに納得することができている。月1回の会議では他にも自由メニューの日の設定等もある。自由メニューの2、3日前からみんな、ソワソワして自由メニューの内容を支援者に話してくれたり楽しみにしていた。

自由メニューを食べた後も、「おしかったよ」と嬉しそうに話してくれた。誰もが「嬉しく笑顔なれる表情」をひとつでも多くのホームで実現するために、生活を充実させ、イベントの企画等にも力を入れていきたい。

グループホームが年々増えている中で支援する介護者も増えて、その支援の質が重要となっている。当事者の支援に対する法人の理念の浸透や、当事者を理解しようとする力が身に着くよう、環境を整え、研修にも力を入れて「よりよい支援」の定着を心がけて支援者も成長できるように取り組みたい。

部門	自立ホームきぼう
部門の 目指す事	<ul style="list-style-type: none"> ・ その人らしく、自信を持って生活を送っている。 ・ 安心できる支援者になれるように、当事者の意見を大事にする。 ・ 望む生活の実現と、健康的な生活を送る。
自分で 決める、 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ やりたいことが実現でき、生活が豊かになっている。 ・ 自分の想いを支援者に話せるようになっている。 ・ 仲間と助け合いながら活動できている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初は戸惑いつつも、それぞれが少しずつ自分の暮らしを確立していった。 ・ 夕食準備の手伝いなど、自分の役割を持つ当事者もいた。 ・ 自分の想いをその場で言ったり、後日、伝えることができていた。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 健康の維持、向上を目指す。 ・ その人に合った生活を送ることができ、充実している。 ・ 衣食住が拡充して快適に過ごせている。
	目標に向けた取り組み
	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれが家族や支援者と協力して、自分の部屋をカスタマイズし、居心地の良い空間にすることができていた。 ・ 部屋の整理整頓は当事者と世話人が一緒に行った。 ・ 玄米ご飯を中心とした健康な食事をパンジーVの厨房と協力し、提供することができた。また、誕生日には特別な食事を用意した。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員はすべての当事者に関われるようになる。 ・ 介護者が当事者のことを知ることができるよう、率先して協力する。 ・ グループホーム当事者会議が活性化し、よりよい支援に繋がっている。
	目標に向けた取り組み
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5人の当事者のことを知り、全員が支援できるようにはなったが、まだまだ至らぬ点はあった。 ・ いくつかの職員研修・虐待防止研修に参加し、学ぶことができた。 ・ グループホーム当事者会議には2名の当事者が参加し、その意見を聞いて、職員間で話し合った。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

2023年4月、香川県高松市国分寺町にパンジーV初のグループホームをオープンした。事業所名は「自立ホームきぼう」、パンジーメディアの作品「きぼうのつばき」にちなみ、大阪の「自立ホームつばき」と対になるように、また香川での当事者の自立生活の新たな希望になるようにと名付けた。

初めてのグループホームの名前は「自立ホーム国分」、男性3名、女性2名が暮らし、支援者は男女1名ずつが勤務する7人で過ごしている。築100年以上の古民家を改装した建物で、外観は綺麗な古民家、内装は当事者が過ごしやすいように洋風にリフォームした。それでも古い柱を残す形の設計で、5人の部屋はそれぞれに微妙に形の異なる部屋となっている。また、リビングには大きな梁も残っており、ライトアップできるようになっている。そのリビングで食事は7人全員で揃って食べる。お風呂やトイレは男女で別々で、リビングを境に扉で仕切れるようになっている。

5人の入居者は初めは緊張した様子であった。初日、強度行動障害のある難波さんは送迎車からなかなか降りられず、「ここはどこだ」という感じで、ホームに入ってから自室の隅にいた。でもすぐに慣れたのか自分の部屋という感じで、くつろぎだし、笑顔で過ごさせていた。支援者は慣れるまでに時間のかかるメンバーもいるだろうと予想していたが、こちらが拍子抜けするほど、みなすぐにグループホームでの生活に慣れていき、仲間との自由な共同生活を満喫している。少人数のグループホームならではの、入浴の時間なども仲間同士で順番を決めている。リビングでみんなで話したり、テレビを観たりしながら過ごしたり、自室で好きなテレビを観たり、ギターを弾いたりして過ごす人もいる。

パンジーVには送迎車で通っているが、時折、ヘルパーを使って遊んでから帰ってくる人もいたり、自分で買い物に出かける人もいる。もちろん共同生活なのでトラブルもある。トイレや洗面所を汚す人、今日の洗濯物を朝までに乾かしてほしいと言う人、不調になるとイライラする人、食事の好き嫌いもそれぞれで異なる。すべてを解決したり、すべての要望を叶えることはできないが、それでも一つひとつ話を聞き、なんとか折り合いがつかうように対応している。それが共同生活だとそれぞれが理解しており、いろいろありながらも楽しく過ごさせている。これからもっと楽しい自立生活になるように支えていきたい。

部門	パンジーメディア
部門の 目指す 事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当事者が役割を持ち、メディアの活動に自信を持って取り組んでいる。 ・ 上映会、講演会など積極的に活動をしている。 ・ 入所施設を問う番組を作り社会に深く訴えている。
自分で 決める、 役割を 持つ	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ ディレクターズクラブが充実し、自分たちの作品を発表している。 ・ キャスターやコメンテーターなど、役割を持った当事者が増えている。 ・ 障害者の権利について自分のことばで語れるようになっている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・ ディレクターズクラブから、当事者の企画によるドラマ「N～私たちも一人の人間」を制作することができた。 ・ フロアディレクター、音声、カメラマンなど当事者が役割を持つようになった。 ・ ピープルファーストの映像「ひとりの人間として～ともに語り合った5日間。そして始まるあたらしい一歩～」では、海外ゲストの講演のボイスオーバーを当事者が担当した。これは新しい試みで担当した当事者は生き生きしていた。 ・ ピープルファースト大会の実行委員長を務めるなど経験を積んだ当事者が、権利について語れるようになってきた。
地域で ふつうに くらす	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんなに障害が重くても地域で暮らせることを発信している。 ・ 当事者の生き生きとした生活を発信している。 ・ 『きぼうのつばき』を見ている人が増えている。 ・ 各地で上映会が開かれている。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2023 年度も毎月欠かさず放送することができた。特に入所施設から地域移行をした人を追った映像では、実際にどう支援をしてきたかが伝わるようなドキュメントとなった。 ・ 「私の歴史」では、これまで語ってこなかったことを語ることができたり、ことばでのコミュニケーションが苦手な人については、生まれ育った町を歩くことで歴史を感じられる映像を発信することができた。 ・ NHK からの出演依頼が増えており、興味を持って見てくれる人が増えていることを実感している。 ・ 東大阪市で「大空へはばたこう」の上映会とシンポジウムを開催することができた。この取り組みは 2024 年度にも継続していく。
職員を 育てる	2024年の姿・目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ メディア担当の職員は、よりよい番組が作れるようになっている。 ・ メディアの活動を通じて、より深く当事者を理解する。

	<ul style="list-style-type: none"> 全職員が何らかのメディアの活動に参加している。
	達成度
	<ul style="list-style-type: none"> よりよい番組を作るための積み重ねが引き継がれていないところがある 映像を通じてスタッフのあり方や支援を見直す機会となった。普段気づいていないことを、客観的に映像を見ることで気づき、改善することができた。 全職員がメディアへ関わるチャンスは番組感想の提出にあるが、提出するスタッフは決まってきた。

一年を振り返って(エピソード・そこから学んだこと)

「きぼうのつばさ」の番組、「私の歴史」の一コーナーで、奥園幸聡さんが出演することになり、原稿を作成するための聞き取りが行われた。最初に支援担当職員とリーダーが行い、その後、メディアの担当者も加わった。何度も奥園さんと話をしたが、なかなか本質的な気持ちやエピソードに触れることができずにいた。

苦勞している私たちを見た理事長が、奥園さんの聞き取りを行った。すると奥園さんは「つらかった気持ち」や感じていたことを話し始めた。その様子を見て、これまで聞き取りをしてきた職員は奥園さんに共感的な言葉をまったく伝えていなかったことに気づいた。これまでの「私の歴史」の放送を振り返り、話した後に当事者がすっきりした表情になるのは、深く気持ちに共感し、聞き取り、それを語るという経験があったからなのだと、改めて学んだ。

パンジーメディアでは、映画監督の小川道幸さんが番組づくりを教えてくれている。その一つに「基本を守る」ということがある。映像を編集しながら台本を作るということはそのうちの一つだ。初めは意味も理解できていなかったため、台本を作ることがあまり徹底できていなかった。しかし、言われた通りに台本を作りながら映像を編集すると、映像のイメージが整理され、アイデアも出てきて、編集しやすいことがわかった。基本を守ることの大切さを痛感した。

この1年で最も大きな変化は、映像制作の現場に当事者スタッフがより多く、そして主体的に参加することが当たり前になったということだ。小川さんからの提案で「当事者の思いを発信するパンジーメディアだからこそ、できる限り当事者が作り手となり、自分たちの思いを表現できる場にしていこう」ということを目標に、当事者スタッフの役割が増えていった。機器を扱うのは難しいのではないかと捉えられていたカメラマンや音声、フロアディレクターなど、当事者がやりたいと思うことにどんどんチャレンジする場になってきている。いつかは支援者のいない現場となり、その時当事者の人たちはどんな番組をつくるようになるのだろうか。そんな時が来ることを楽しみにしている。